

“子どもを叱るという事”

子どもを叱るという事がどういうことか、時々考えさせられてしまいます。

それらは子どもを成長させるため？

やってはいけない事を教えるため？

指導者の虫の居所が悪かったから？

叱る時、大きな声のほうが効果があがるように感じられる“気”がするが、大声は、相手にとっては立派な暴力となり、それだけで恐怖を味あわせてしまいます。

大きな声で萎縮してしまった子どもは、いったい何について叱られているのか、中身を見失い、即ち、大きな声で怒鳴られる事だけを回避する、いわゆる回避学習をした事になります。叱る側も急いでいる時や何度も同じ繰り返しの過ちの場合、ついつい教育を離れて感情的になってしまい、「何やってるの」「なんで叱られたか自分で考えなさい」「やる気がないならこの場から出て行きなさい」と明らかな教育指導の放棄を示す状態になってしまうことがあります。

感情に任せて“怒る”ではなく、教育的に叱る場合は、根気よく相手が納得できるまで、してはいけない理由や、何故しなければならないかについて誰にでも分かりやすい言葉で、説明することが肝心です。

子どもを叱るとき、皆が見ている前で、さも見本のように、子どもの自尊心を傷つけながら叱る場面に遭遇します。

叱られた理由を直ぐに理解できる年令に達し、グループ全体が同じ過ちをしない事を目的として、全体を戒める事を目的とすれば、効果はある程度期待できるかもしれませんが、果たしてこれは子どもにとって良い事なののでしょうか、子どもにだって言い分があるかもしれない、それなのに皆の前で叱られた事の方がよほどショックな出来事なのではないでしょうか。

叱る時は、できる限り面と向かってじっくりと話し合うことが大事です。兄弟や姉妹でどちらかを叱らなければならない時など特に気を使ってあげるべきだと思います。たぶんどの家庭でも、年長者の方を「お兄ちゃん(お姉ちゃん)なんだから」という理不尽な理由だけで、殆ど言い訳も聞かないままだと思います。

叱る時はそのタイミングを逃してはいけません。「さっき、あそこで」と言われても子どもはきっと覚えてもいないし、思い出すこともできません。褒める時も同じです。その場ですぐに理由も理解させた上で対処することこそ大切なんです。

最近の若者も叱られるという事に慣れていないのかもしれませんが。

先日群馬県の警察学校の研修で、「警察活動には失敗がつきもの。人間は弱いものという自覚を持って」と諭すように話した。という記事が掲載されていました。最近の若者は(いつの時代にも言われる事ですが)叱られる事を恐れるあまりミスを隠す、報告や相談をしない事が多くなった事を受けての「方針転換」だそうです。

ある警察幹部は「積極的になれと言われるが一步踏み出したら失敗するかもしれない。何よりも叱られるのが怖い」と若手から訴えられたことがあるという。新人警察官らに対する教育が、失敗を戒める姿勢から「自分の弱さを認めた上で問題に向き合おう」という方針に変わりつつある。失敗は許されないという考えにとらわれすぎ、ささいなミスを隠して重大な不祥事に至る事案が相次いでいるためだ。

若い教職員や子どもたちもそのような状況に慣れつつあるかもしれません。

叱り方に注意しないと無駄な衝突やすれ違いが生じる可能性もあります。ゆとり教育の現場で教育を受けてきた若者が、結果を第一とする場合、そのプロセスを見ずに、結果だけについて評価してしまう。

叱るという事は、何かしらの改善のヒントを与えてあげなければいけない。弱みに気づかせ克服するための助言をしてあげるべきなのです。弱みを強調するために叱ることは、相手の成長を妨げてしまう可能性もあります。

何もわからない小さな子どもたちや若い教職員にはストロングポイント(褒めることのできる行動)を皆の前で褒めることで強調し、家庭や園で成長した子どもたちや、年数を経験した教職員には、改善点を示したうえで叱られた理由についてお互いが理解できる指摘を伴わなければならない。

相手を尊重し、相手を大切に思っている事が相手に伝わるよう理解しあう事こそ共に育むという事ではないでしょうか。

文責 古川光男